

甲斐説宗の1970年前後の創作における「一性」と「心操」  
—《メゾソプラノとフルートのための音楽》第1曲をめぐって  
原 墨

日本の作曲家、甲斐説宗（1938-1978）は、1966年から1969年にかけてベルリンに留学、帰国後は独自の作風の探究を続けた。先行研究は甲斐作品の特徴を「聴き手の傾聴を誘うところ」に求め、その様式を「限られた素材の反復」と「漸次的な変化」という二つの観点から特徴づけている。

本論文は、甲斐がドイツから帰国した1970年前後に焦点を当て、理論的言説と楽曲の分析を通じて、その創作の詳細を詳らかにする。まず、甲斐のテキストにあらわれる「ただの状況の設置」という記述に着目し、そこで甲斐の想定する「状況」というものが、先行研究の強調する「限られた素材の反復」と「漸次的な変化」という二つの論点には必ずしも還元されないことを指摘する（第1節）。そこで、本論文では「限られた素材の反復」と「漸次的な変化」という二つの観点に代えて、甲斐が自らの創作を練り上げる際に使用した「一性」、および、それに関連付けられる「心操」という二つの概念に着目する。両概念は甲斐の創作を理解する上で重要であるものの、まとまりを意味する「一性」と突然の変化を内包する「心操」は、一見したところ矛盾するようにも思われる（第2節）。しかしながら、甲斐による《メゾソプラノとフルートのための音楽》（1968-69）を対象にし、両概念の関係、そして両者がどのように具体的な構成に結びついているかを検討するならば、これらの概念は見かけの矛盾を超え、相補的に機能することが明らかになる（第3節）。

甲斐が独自の作風の探究を強く意識し始めた1970年前後に焦点を当て、その作曲思想と技法を検討する本論文は、甲斐のその後の創作を検討するための有効な視点を提示するものであり、ゆえに、将来的な甲斐研究の進展に資するものとなる。